史跡 恭仁宮跡（くにきゅうせき）　平成 30 年度発掘調査の成果

大極殿院南面区画施設と考えられる遺構をはじめて検出

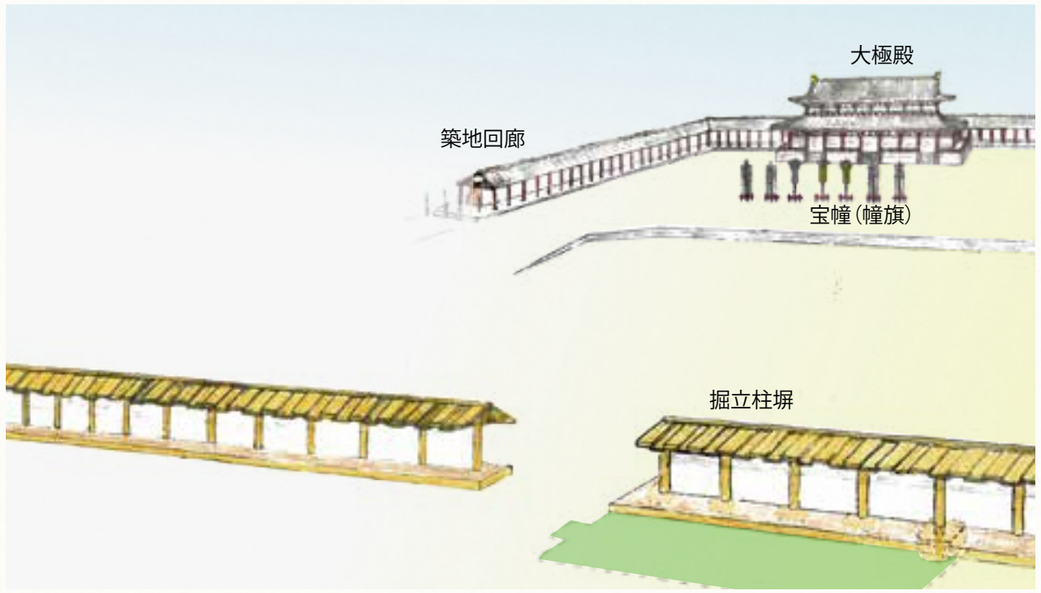
恭仁宮中心部の大極殿院（だいごくでんいん）の外郭施設は、これまでの発掘調査から、第一次平城宮大極殿院から移築された築地回廊が用いられたことがわかっています。しかし、大極殿院の南面区画施設の位置と構造は確定しておらず、恭仁宮跡の実態を解明する上で課題となっていました。

平成 30 年度の第 98 次調査で、南面区画施設の想定地点付近で東西方向の掘立柱塀跡を検出しました。はじめて確認された南面区画施設と考えられる遺構です。今回の発掘調査成果から、恭仁宮大極殿院は南面だけ掘立柱塀（※）という他に例のない構造（第１図）であった可能性が高くなりました。

また、奈良時代の他の宮では大極殿院南面には大規模な門（大極殿院南門）が造られるのが一般的ですが、恭仁宮の大極殿院南門は控え柱を持たない簡素な作りだったようです。

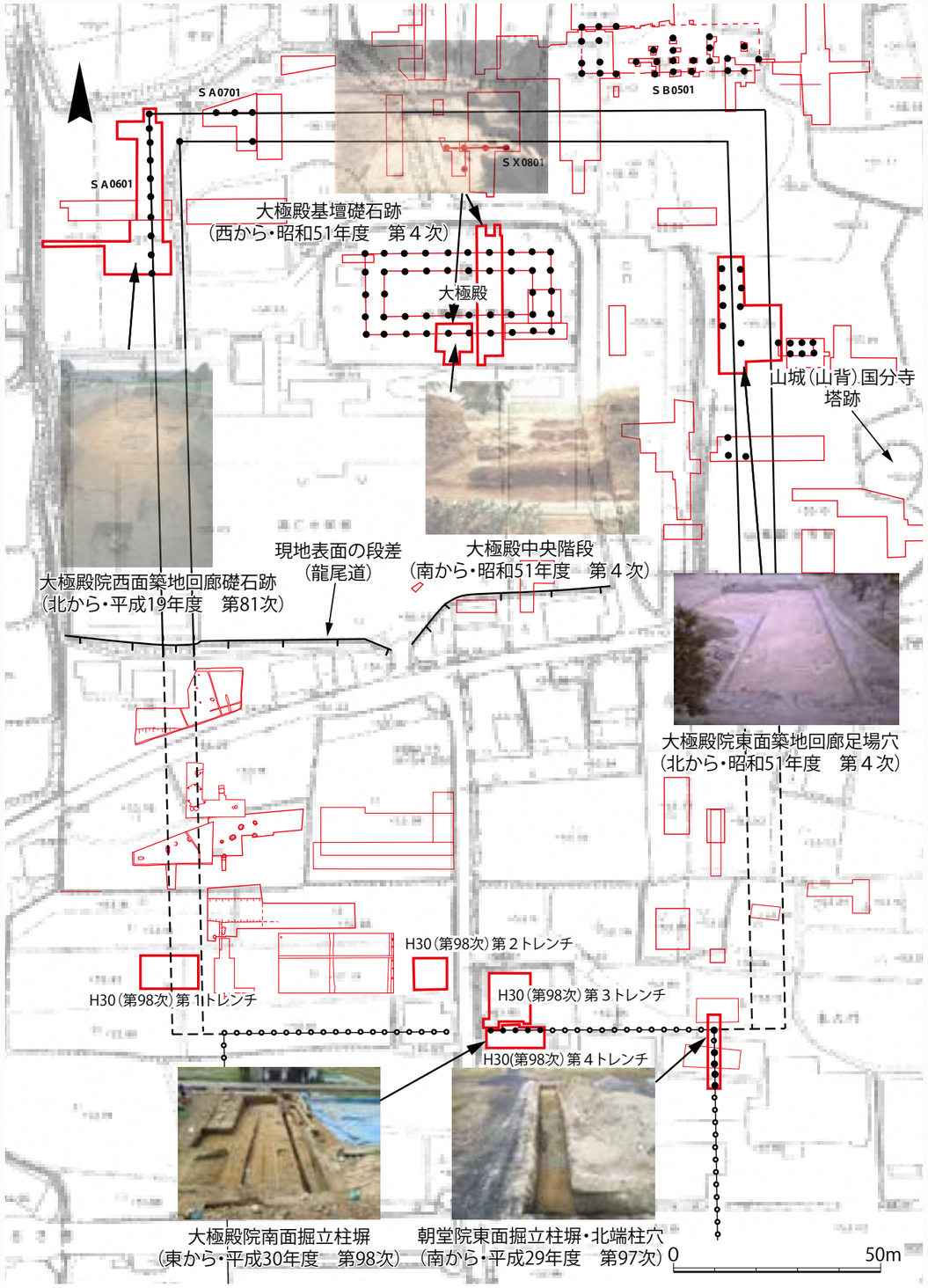
奈良時代の歴史書『続日本紀』には、恭仁宮の造営に難航し多大な出費を強いられたことが記述されています。発掘調査の所見と文献記録を照合すると、大極殿院南面築地塀・南門の工事まで手が回らず、仮設の掘立柱塀で間に合わせたと考えられます。

平成 30 年度の発掘調査では、恭仁宮の構造を解明する上で、重要な成果を得ることができました。ただしきわめて異例な遺構であるため、今後も周辺の調査を継続し、実態を解明する必要があります。



第１図　大極殿院の復元イメージ図（南東から）

※将来の発掘調査等によって復元イメージを変更する可能性があります。



第５図　大極殿院全体図・これまでの主な調査地点

編集　京都府教育庁指導部文化財保護課
京都市上京区下立売通新町西入藪之内町
TEL(075)414-5903
URL:http://www.kyoto-be.ne.jp/bunkazai/cms/

発行：平成 31（2019）年１月

京都府教育委員会

平成 30 年度第 98 次調査の成果

はじめに

平成 29 年度の発掘調査で朝堂院北端の柱穴を確認したことから、平成 30 年度はその北側に大極殿院南面回廊があると想定し、調査をはじめました（第２図）。しかし、検出された遺構は、当初の予想とは全く異なるものでした。

第１トレンチ　大極殿院南西隅付近の想定地点に設定しました（**第２図①**）。恭仁宮期の整地層を確認しましたが、大極殿院回廊の遺構は検出されませんでした（**第４図**）。

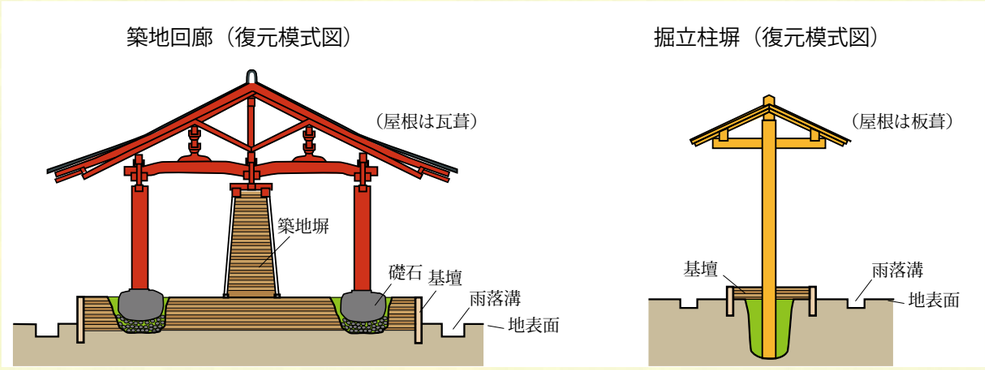
第２トレンチ　大極殿院南門北西部の想定地点に設定しました（**第２図②**）。柱穴２基を確認しましたが、南門の遺構は検出されませんでした（**第４図**）。

第３トレンチ　大極殿院南門南東部の想定地点に設定しました（**第２図③**）。恭仁宮期の整地層を確認しましたが、南門の遺構は検出されませんでした（**第４図**）。

第４トレンチ　当初想定した地点より約 10 ｍ南で東西方向の２時期に渡る掘立柱塀跡（**SA18001・18002**）を検出しました（**第４図**）。古い方の **SA18002** には柱を立てた痕跡は見つかりませんでした。新しい方の **SA18001** は柱穴が約３ｍ（10 尺）間隔で一列に並び、朝堂院北端柱穴から真西の位置にあたるので（**第２図④**）、大極殿院南面掘立柱塀と朝堂院北面掘立柱塀を兼ねていることが分かります。また、西端の柱穴（**SP401**）は恭仁宮中軸線から約 4.5m（15 尺）東に位置します。**SP401** が大極殿院南門の東柱のようです。**SP401** の南北には柱穴が確認されないことから、控え柱を持たない簡素な構造の門（または通路）と考えられます。

まとめ

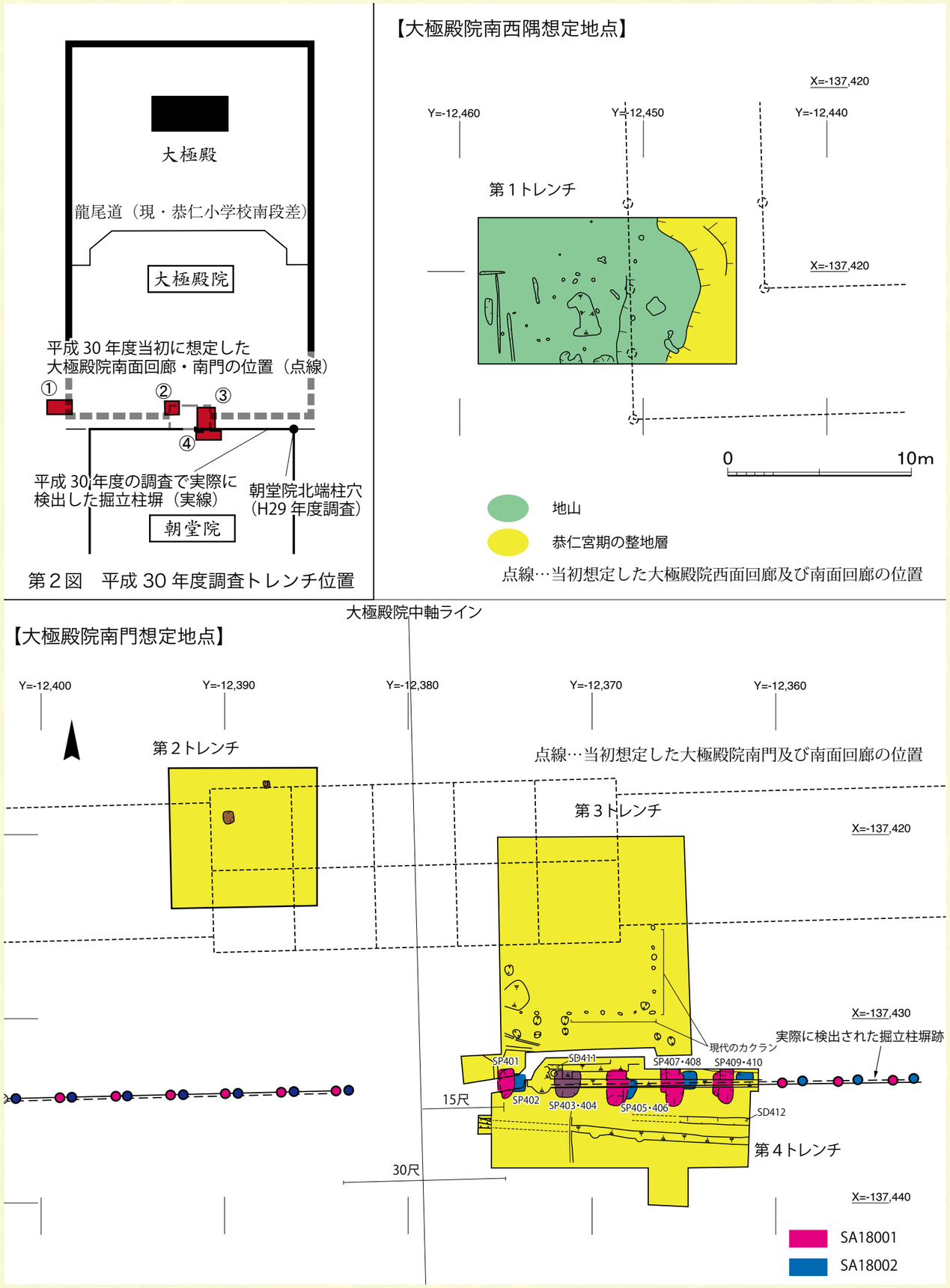
今回の調査では、想定外の地点で大極殿院南面区画施設と考えられる掘立柱塀が検出されました。古代の宮では大極殿院南面区画施設は重要な施設とみなされますが、恭仁宮大極殿院では、格式の高い築地回廊ではなく簡素な掘立柱塀（第３図）だったと考えられます。



第３図　築地回廊と掘立柱塀の構造（横断）イメージ図

※**築地回廊**は、中央が築地塀でその両側が通路になり、屋根には瓦が葺かれます。宮殿建築で最高の格式をもつ区画施設で、多くの資材と複数の工程を必要とする複雑な構造です。**掘立柱塀**は、柱を一本ずつ等間隔に一列に立て、屋根は板葺きとなります。区画施設としては簡素な構造です。

第２図　平成 30 年度調査トレンチ位置



第４図　平成 30 年度調査トレンチ平面図（S=1/250）